〝おんさいと音斎人〟新聞

さて、今年も〝音斎処〟の開催時季となりました。また、この四月二日からは、岩村の街並が撮影場所となった、NHKの連続テレビ小説『半分、青い。』も放送開始になります。想うに、今年の岩村は、一段と観光客の多い年となりそうです。

「冬眠」と称して、〝音斎処〟開催を休止していた期間に、個人的にはまた新たな経験をしてきました。あるテレビ番組の製作現場への訪問と、ピーター・バラカン氏との面会です。

二月の初旬に、（株）エルプの竹内さんから電話があった。内容はと云うと、タモリ倶楽部の収録の現場に来ませんか、とのお誘いと、その後ピーターさんと直接会って〝音斎処〟での出前DJをお願いしませんか、と云うものだった。即答しかねて、スケジュール調整してから連絡しますと応えたのだが、その話を妻にすると、「勿体無い」「二度と無いような機会なんだから是非行くべきだ」との仰せだった。そんな遣り取りがあって、町内会議をキャンセルして東京に向かった。

久し振りの東京出張は、二月の十六、十七、十八の二泊三日、充実した三日間だった。

タモリ倶楽部の収録現場というのは、東京の麻布十番にある制作会社のビルで行われた。今回のテーマは『アナログオーディオ出張販売シリーズ①激レア　ターンテーブル大試聴会』とのことで、レーザーターンテーブルと発条式ターンテーブル、レコード盤洗浄器などが紹介されるらしい。番組の人気コーナー「空耳アワー」の二週分の収録も同時に行われた。

収録が行われたのは二月十七日（土）だったが、収録の為の準備は前日の夜十時過ぎからということで、出張第一日目は、エルプ本社での選盤と試聴から始まった。

今回の出演者は、タモリさん、星野源さん、カンニング竹山さんの三人と云うことで、選盤はタモリさんと星野さんの好みそうなジャンル・楽曲となった。持ち込む盤はおよそ二百枚、その中で実際に三人に聴いてもらう盤を五枚ほどに絞り込み、収録に使用するレーザーターンテーブルを始めとするオーディオ機材とともに移動用の車両に積み込み、南浦和のエルプ本社を出発したのは午後九時を過ぎた頃だった。

麻布十番という地名は、テレビでよく耳にし、映像でも目にしてはいるが、実際に訪れてみると、いま自分がどこに居るのか皆目わからないのが実感で、ただ、夜も十時を過ぎているというのに随分と人通りが多いのは、やはり東京なんだ、と妙な感慨に耽ってしまった。

番組の収録現場というのは、こんなに夜遅いのに、随分と大勢の人がいるものだと妙に興奮した。きけば今夜は皆ここで泊まりだという。

〝音斎処〟でもそうだが、音というのは現地・現場で実際に鳴らしてみないとわからない。安田邸では実際に鳴らしてみて響きの良さに驚いたが、収録現場では逆だった。全く響いてこない、抜けた感じの音しかしないのだ。当然といえば当然で、収録場所は会議室を使っているのだ。写真でお分かりの通り、広さはあるが天井は然程高くなく、スピーカーの後ろの壁は中途半端な硬さで、音のメリハリを失わせてしまっている。何度もスピーカーを

移動させやっとこれならばという場所を見つけたのだ。それでもまだもの足らないので、翌日レコードジャケットを壁面に並べて反響を調整することにし、事前の作業を終え、現場を離れた時には日付が変わっていた。

そう言えば、新幹線の中で昼食として食べた駅弁以外になにも食べていないことに気づき、帰途で見つけたファミマに立ち寄り、肉まんとピザまんを頬張ったのだ。余談になるが、この時初めてナマサダで話題となった『生まれたてのさだまさし』のチャイムを耳にした。

翌収録当日は十時過ぎ頃に現場に入った。収録は十三時頃から始まるということで、前日できなかった音場調整を行うためだ。

タモリさん達の現場入りは十三時頃とのことだったが、収録日が平昌での男子フィギュアの決勝と重なり頭から押した状態での収録となった。終わってみれば一時間超の押した展開になっていた。

生で見るタモリさんは随分歳を召された感が強かった。ナマ星野源さんは想像以上に小さかった。ナマ竹山さんは極く普通の人だった。（勿論お三方ともに今回初めて見るのであるが。）事前にサインとか話しかけとかは厳禁と云われていたが、カメラが回った途端に表情が変わる三人を見ていると、ここは彼らの職場なんだということがハッキリ解り、サインを強請るなど微塵も思い浮かばず、こちらもレーザーターンテーブルを売り込みに来てるんだ、との思いが強まった。

ロケ弁というのを初めて食べた。別にナンテコト無い弁当なのだが、食べる環境の所為か妙に美味かった。

収録時間は延べ四時間ほど。たった三十分の番組をつくるのにこんなに時間をかける、いやこんなに時間がかかるんだと、心から驚いたものだ。係わる人の数も前日の比ではなかった。カメラ、音声、モニター、美術、衣装、タレントマネジャー等々ざっと見ただけでも四十名程が忙しそうに動き回っている。一つの番組を作るのってとっても大変なことなんだと・・・。

収録中はずっとモニター画面を見ていた。今見ている画が放送時にはどんな風になるんだろう。どの画をどの様に使うんだろう。そして、素の驚きが出るもんだろうかと。

タレントというのは大したもので、驚きもしないものをさも驚いたように巧く表現する。しかもジャンルが自身の守備範囲、好きなものとなれば尚更だ。タモリさんなどは、ジャズを中心に広くレコードに関する知識も豊富だ。レコード自体も聴き込んでいる。それは収録中の言葉の端々で感じられる。

レーザーターンテーブルの収録場面になった。その表情が素の驚きに変わった。そうだよね、違いすぎるのに驚くのは当然といえば当然だよね。そんな感想だった。

そんな感じで「タモリ倶楽部」の収録は終わったのである。

昨年はレコードの製作現場である、日本コロムビアのカッティングスタジオに行けた。今年はテレビ番組の製作現場に行けた。六十を越えてから、それまでの人生とはかけ離れたような事に遭遇している。六十までの人生と比べることなど無意味だが、これから先どんなことと遭遇できるか、結構楽しみなのである。

字数の関係で、ピーター・バラカン氏との面会については別の機会とし、ここでは今年夏、八月廿五日（土）の〝音斎処〟にバラカンさんにおいでいただけることをお知らせして結びとします。

〝音斎処〟新聞　第七号
発行人：横田　文孝　YOKOTA Fumitaka
発行日：平成三十年三月二十四日
問合せ：On-Site@tajimiyori.com